

「エンパワメントの視点に基づく路上生活者支援に関する研究」

【論文内容の要旨】

序章 本研究の目的と方法

序章では、問題提起、研究目的と方法、研究の枠組み及び研究課題の設定、論文の構成の説明を行った。本章の冒頭において、ソーシャルワークの発展の歴史を貧困問題からの視点により振り返ることにより、ソーシャルワークは貧困問題からの問いかけに応答する形で発展してきている軌跡を明らかにした。

その一方で、近年では社会福祉サービスが普遍化する中で貧困・低所得者支援をソーシャルワークの視点から検証する取り組みが十分とは言えず、特に、路上生活者の支援における研究は、政策評価や実態把握が主でありソーシャルワークの文脈で支援の検証が乏しいという問題提起を行った。

路上生活者は、社会の辺境に置かれ、搾取、排除の典型として位置付けられる存在である一方、ソーシャルワークが真に向き合わなければならない対象に属する人々ではないかと考えられるため、「ホームレス状態」に置かれている人々に対して、ソーシャルワークはどのような支援を実施しているのかに注目した。

以上を踏まえ、本論文の研究目的を以下の通り設定した：路上生活者に対する今後の支援のあり方として差異と多様性、個別性に依拠するソーシャルワークが求められていること、特にエンパワメントの視点に基づく支援の有用性を明らかにすることである。なお、この点を解明するため路上生活者の支援の場として自立センター（以下、センター）を素材に研究することとした。

上記の研究目的の究明にあたり、本論文は、以下の 2 つの研究課題を設定した。

まず、研究課題Ⅰは「センターは就労支援に特化された施設であるにも関わらず、なぜ就労自立率が低いのか」であり、次に研究課題Ⅱは「なぜ、センターのスキームにより就労自立を果たすことができたのか」である。

研究課題Ⅰでは、本論文においてエンパワメントの有用性を明らかにするため、現在のセンターにおいて路上生活者に対する自立支援スキームがパワーレスの状態に陥る構造が存在することを究明することを狙いとした。

研究課題Ⅱでは、センターにおける自立支援スキームがパワーレスの状態に陥る構造に

も関わらず、就労自立を果たしている背景を明らかにすることにより、現状では可視化されていないエンパワメントの要素の抽出を試みることを狙いとした。

第1章 生活困窮者自立支援法下におけるセンターの位置づけ

第1章では路上生活者支援を主題とした先行研究の概観、センターの設立根拠であるホームレス自立支援法並びに生活困窮者自立支援法の条文比較、東京都におけるセンター運営の方針の内容を検証した。これらの結果、センターには多様なニーズを抱えた人々が就労に特化されたセンターに「混在」していることにより、就労自立が低い結果となることが明らかとなった。この点からニーズと支援策が乖離することにより、「就労自立困難」とのラベリングが付与されセンターの支援枠組みから退出を求められること、「就労自立困難」層に対するセンター退所後の継続的支援は一時的な生活の場の提供であるため、安定した地域生活への見通しを立てることが難しい状態に留め置かれる構造の存在が明らかとなった。

引き続き、第2章並びに第3章において、東京都内のセンターPの実践を手掛かりに、アセスメント実施状況、入退所実績、再利用者における利用目的に関する調査を実施した。

第2章 センターにおけるアセスメントに関する一考察

第2章では、ソーシャルワークの共通言語と位置付けられるアセスメントに注目し、センターPの緊急一時保護事業で実施されている基礎アセスメントの実施状況を調査した。

その結果、センターの主幹機能である就労支援に至る前の段階で、約4割の入所者が「就労自立困難」を理由に支援の枠組みから求められていること、基礎アセスメントの目的は自立支援事業において実施される就労支援の対象者を選別であり、ソーシャルワークの領域で共通で語られる、本人を中心に位置付けて、現状を起点に自己選択と自己実現を支えるためのストレングスの理解や環境調整、支援計画を立案するために必要となる情報の収集とは異なる内容であった。

第3章 自立支援センターの利用者実態を通してみる支援課題

第3章では、センター利用者の約2割を占める再利用者の利用目的に注目した。センターの再利用は路上生活から脱して再び地域での安定した生活を目指す「再チャレンジ」の機会なのか、路上生活を継続するための「一時的な生活の場」として利用しているのかを検証した。その結果、センターの再利用回数の増加と「一時的な生活の場」を目的とする層の増加には相関性が見られ、センターの再利用は、支援者側が想定するような「再チャレンジ」

【論文要旨】 エンパワメントの視点に基づく路上生活者支援に関する研究

ー自立支援センターPの実践を手掛かりにー

人間科学研究科 社会行動学専攻社会福祉学教室

15960102 櫻井 真一

の機会としては機能していないことが明らかとなった。また、再利用を著しく繰り返す人には、精神的な疾患、知的な障害、コミュニケーション上の生活のしづらさを体現されており、一般就労を前提とした就労支援の実施は明らかに困難と考えられる人々がセンターの利用を繰り返している状況が見られた。

第4章 エンパワメントの視点に基づく路上生活者支援に関する研究

ーエンパワメントの概念整理に基づく分析枠組みの構築ー

第4章以降は、研究課題Ⅱを検証している。すなわち、センターの支援スキームによりセンターは、なぜ3～5割の就労自立率を維持できているのかに注目した。本研究では、この状況の背景には、可視化されていないエンパワメントの要素が機能しているのではないかと想定しているため、第4章では、ソーシャルワークの領域を中心にエンパワメントをテーマとした文献研究を通してエンパワメントに関する概念整理を行うと共に、筆者が捉える路上生活者を対象としたエンパワメントのモデル（私案）を提示した。

第5章 エンパワメントの視点に基づく路上生活者支援に関する研究

ー退所者・職員インタビューに基づくエンパワメント要素の抽出への試みー

センターPにおける就労自立者、および彼らの支援担当職員を対象にインタビュー調査を実施した。

その結果、回答者におけるセンターを利用した意義は、人生や生活に対する認識の変化を生み出したことであることが明らかとなった。そこで、インタビューを通して、元利用者には、人生や生活に対する認識の変化を生み出したきっかけはどのような事柄だったのか、そのような変化を促進した要因はどのような事柄か、また、認識の変化はどのような結果を導いたのかについて、元利用者が語る内容を明らかにした。

さらに、職員を対象としたインタビューを通して、利用者に生じた認識の変化について、支援者はどのように気づくことができたか、変化を促進するためにどのようなアプローチを実施したか、その結果はどのような変化が生じたかについて職員の語りを検証した。

その結果、センターPにおける支援を通して、元利用者にはセルフエンパワメントが促進されたと考えられるエピソードが語られていた。また、職員をはじめとした外的な要因がセルフエンパワメントを促進していたという認識が示されていた。

一歩王、元利用者のセルフエンパワメントが促進される契機となったエピソードに基づく、職員を対象としたインタビュー結果からは、元利用者が語るエピソードは、職員の視点においては日常業務の一環としての対応であり必ずしもセルフエンパワメントの促進を意図して関わった結果ではないことが明らかとなった。

以上の検証の結果、現状において潜在的なエンパワメントの要素が利用者のセルフエンパワメントの要因として機能していることが明らかとなった。

終章 全体考察

第1章から第5章までの分析結果を踏まえた全体考察を行った上で、研究課題Ⅰ並びに研究課題Ⅱに関する結論、本研究の課題＝限界を提示した。

本研究の結論は以下の通りである。研究課題Ⅰについては、現状の支援実績として明らかにされた就労自立率は、実質的には制度が想定する層の以外の層による支援実績である。したがって、単純に3～5割という就労自立率の数値のみを持って「低い」とは言えないのである。問題は、センターにおいて制度の想定を超えた層が「混在」したことにより就労自立率が低下しているのではなく、センターの支援スキーム自体が既に破綻しているにも関わらず、ニーズと乖離した支援策が繰り返し実施されていることである。

また、本研究による調査の結果では、ニーズと支援策の乖離が繰り返されることにより利用者のみならず支援者もパワーレスの状況に陥るとことが明らかとなった。

研究課題Ⅱについては、制度が想定していた対象像とは異なる層に対する整合性の乏しい支援策であるにも関わらず、所与の条件において利用者と職員による支援関係を通して「折り合った」成果であると考えられた。すなわち、センターにおける就労支援という手段を通して、直面した「転換点」における選択と決定に際し、入所者のセルフエンパワメントを促進するような関わりが存在したことにより、事業目的である就労自立に至ったものと考えられる。

だが、本研究におけるインタビュー回答者の属性からも明らかなように年齢的や身体状況から見ても長期にわたる就労の継続の想定は困難が予想される。就労あるいは就労の継続ということは企業側の裁量で採否が決まる側面が大きく、センターにおける支援効果であるとは断言しがたい。したがって、就労できたか否か、あるいは退所先はどこかという件数の積算ではセンターの支援の成果を明らかにできない。

【論文要旨】 エンパワメントの視点に基づく路上生活者支援に関する研究

－自立支援センターPの実践を手掛かりに－

人間科学研究科 社会行動学専攻社会福祉学教室

15960102 櫻井 真一

センターが社会福祉の支援施設として、入所者の自立を支援する場として位置づけられるのであれば、社会福祉における専門職として入所者に対しどのような支援が行われ、どのような成果を生み出すことができたのかについてソーシャルワークの視点から語られる必要がある。支援者は、日常業務における事象への対応にとどまらず、利用者の人生や生活に対する認識の変化に気づき、その背景にある構造や利用者の心情を読み解くことによりエンパワメントを促進するようなアプローチを目的意識的に活用することが求められる。そのための職員の資質やスキルを蓄積することにより、今後のセンターにおける存在意義を見出すことが求められるということが本論文の結論である。

最後に、今後に残された課題として、本論文は、エンパワメントの視点に基づく路上生活者の支援として具体的な支援モデルとして体系化し、その有効性を検証するという段階までは至っていないこと、また、センターPという1つの施設における支援実績や支援の実施体制に基づく検証であったため、他のセンターにおいても同様の傾向を読み取ることが可能であるのかに関する検証の必要性を指摘した。